

## ベトナム北部の少数民族——モン(苗)族を中心として——

田畑 久夫

モン族の主要分布地域は、イエンバイ省のニギアロからサンホア省にかけてのダー川水系およびマー川の上流域である。モン族の集落は一ヶ所に集中して大集落を形成するのではなく、分散して居住する傾向がみられる。そのため、主として女性が日常生活において着用している上着の色などを指標として「黒モン」族、「白モン」族、「青モン」族、「赤モン」族などに区分されてきた。モン族は、このように分派集団が存在するが、祖先はすべて長江中・下流から淮河一帯にかけて居住していたとされる「三苗」であるとする見解が有力視されている。その後彼らは、漢民族の支配を逃れるため、西南中国に移動し、さらにその一部が南下し続け、ベトナム北部の山岳地帯に到達したものと考えられる。なお、ベトナム側の文献によると、モン族がベトナムに來住した時期は、一七世紀末、一八世紀末および一九世紀後半の三回存在するとされる。

モン族の主要な生業形態は伝統的には焼畑農業であった。彼らがベトナムに南下してきたのは、漢民族の弾圧から逃れるためであったが、ベトナム北部の山岳地帯には焼畑が行なえる森林が残っていたという自然条件も見逃すことができない。本報告では、モン族の生業形態を中心とした生活状況をスライドをまじえながら具体的に

検討した。

## 巖本善治の女学思想——キリスト教の側面から——

掛川 典子

巖本善治の女学思想を、フェミニスト視点導入以降の研究動向を踏まえた上で、キリスト教的側面に注目してその女性論としての特色を吟味した。まず田口卯吉と交わされた女学論争のなかで聖書の字句を連想させる箇所を吟味し、「ガラテアの信徒への手紙」における本来の男女平等論との対応関係を見出した。次に、巖本の単独著作である『吾党之女子教育』に限定して、一、女子教育の理念としての「妻母」論、二、終末観と女性への期待、三、不婚論、四、「細君内助」と家庭訓、五、女子教育者としての覚悟、という五点にわたって分析した。巖本の論は聖書の記載に忠実ではないので返って、フェミニスト神学が批判する、聖書に根拠づけられた男性優位の類比的性別序列への言及がない。性別役割分業観はむしろ陰陽論に依っている。巖本は、婚姻における精神的理想の共有を求め、女性に幸福になれる確信が無い場合不婚を勧め、教育や福祉領域への参入を重視する。家庭の「妻母」となるよりも、国家や国際社会に母性的貢献をすることを評価する。これは一九世紀ドイツの精神的母性論を思い起させる。また後に吉岡弥生によって、『女学雑誌』が「女性文化」の発信地として回顧されたことは興味深い。